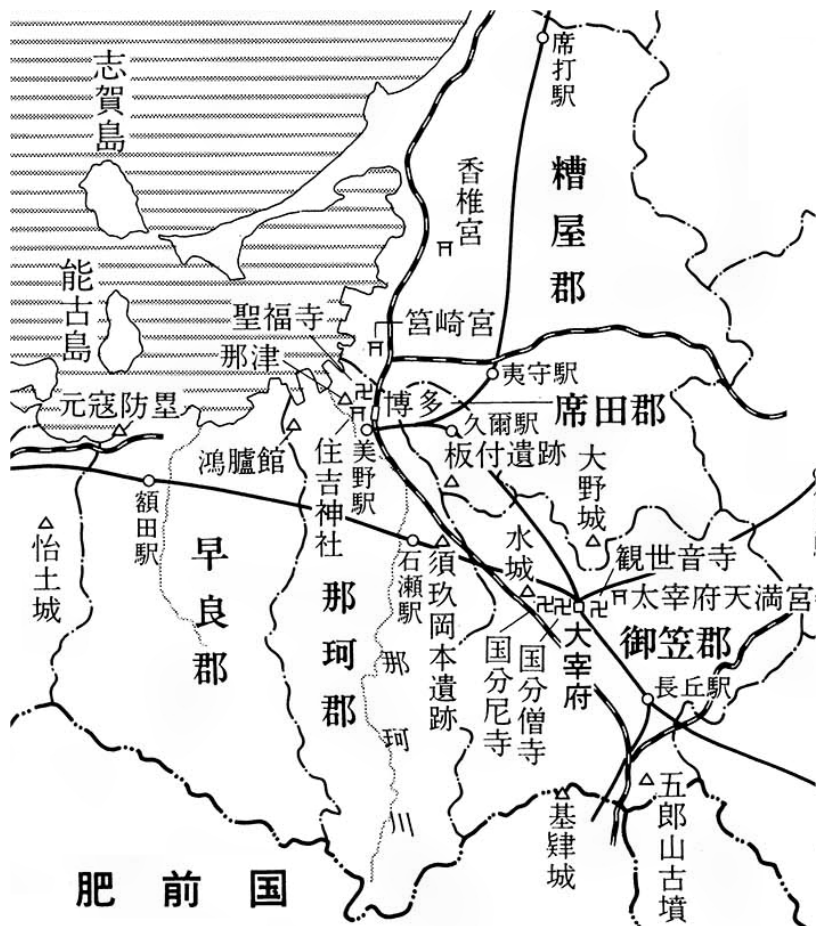


## 「令和」と梅花宴

北川和秀

### 1. 大宰府とは

- ①九州に置かれた朝廷の出先機関で、「遠とおの朝廷みかど」と呼ばれた。
- ②博多湾から南東に十五キロメートルほど入った内陸に位置し、すぐ北の大野山（現在は四王寺山）には大野城が築かれ、西には水城が築かれていた。
- ③大宰府の役目は、九州諸国の行政の統括、外交、国防。
- ④長官は大宰帥といい、官位相当は従三位。奈良時代には大納言または中納言の兼任が多い。中納言で兼任した場合は現地に赴く。梅花の宴の折の大宰帥は大使旅人。



〔『国史大辞典』（吉川弘文館）「筑前国」の付図から〕

2. 大宰府時代の大伴旅人

西暦	年号	天皇	執政	事項	年齢
七二七	神亀 四	聖武	長屋王	暮の頃、正三位中納言大伴旅人、大宰帥兼任	63
七二八	五			四月初め頃、旅人の妻死去 七月二十一日、山上憶良の日本挽歌	64
七二九	天平 元		藤原武智麻呂	二月十二日、長屋王自尽 三月四日、藤原武智麻呂、大納言任官 六月二十日、背に「天王貴平知百年」の龜献上 八月五日改元。八月十日、光明子立后 一月十三日、大伴旅人の宅で梅花の宴	65
七三〇	二		智麻呂	十二月、大伴旅人、大納言に任官、帰京	66

3. 梅花宴の歌三十二首とは

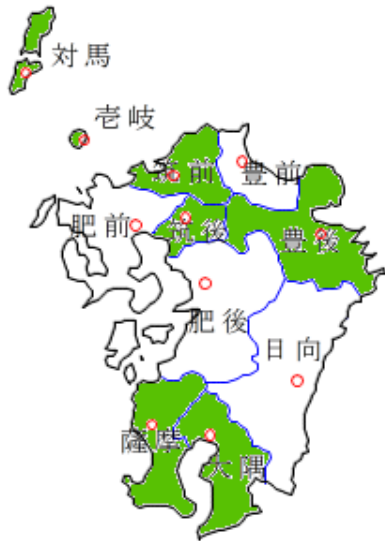
- ① 天平二年正月十三日に大伴旅人邸で催された梅花の宴でよまれた歌。
- ② この日は現代の太陽暦では七三〇年二月八日に当たる。立春の三日後。
- ③ 参加者は大宰府の役人と九州諸国の役人、合計三十二名で、一人一首ずつの歌が記録されている。

④ 参加者

- ・ 大宰府の官人 17人
- ・ 造筑紫観世音寺別当 1人
- ・ 九州諸国の官人 計11人

筑前国 4人	筑後国 1人
豊後国 1人	大隅国 1人
薩麻国 1人	壱岐国 2人
対馬国 1人	

・ 不明 3人



#### 4. 梅花の歌の序文

○本文、訓読文、口語訳は別紙参照。

#### 5. 帰田賦と蘭亭序

① 帰田賦……後漢の官人・文人・科学者である張衡（七八〜一三九年）が作った賦。『礼記』や『詩経』の影響を強く受けている。永和三年（一三八）の成立か。官職を辞し、田舎の穏やかな自然の中で暮らし、書を読み、文筆に勤しもうという内容。六世紀に編纂された『文選』に収録されている。

② 蘭亭序……東晋の時代、永和九年（三五三）三月三日に、王羲之は名士を蘭亭（浙江省紹興市の南西にあった亭）に招き、四十二名で曲水の宴を開いた。その時に作られた詩二十七編（蘭亭集）の序文として王羲之が書いたもの（草稿）。書の名品として知られる。

③ 蘭亭序と梅花宴序とは趣旨が共通。

・ 永和九年、歳在癸丑。暮春之初、会于会稽山陰之蘭亭。脩禊事也。（蘭亭序）  
（永和九年、歳は癸丑に在り。暮春の初め、会稽山陰の蘭亭に会す。禊事を脩むるなり。）

・ 天平二年正月十三日、萃于帥老之宅、申宴会也。（梅花宴序）  
（天平二年正月十三日、帥の老の宅に萃まり、宴会を申ぶ。）

④ 蘭亭序と梅花宴序とは字句の似た部分もある。

・ 是日也、天朗氣清、惠風和暢。（是の日、天朗らかに氣清く、惠風和暢せり。）  
・ 于時、初春令月、氣淑風和。（時に、初春の令月にして、氣淑く風和らぐ。）

⑤ 帰田賦と梅花宴序とは字句のよく似た部分がある。

・ 於是、仲春令月、時和氣清。（ここに、仲春の令月にして、時和らぎ氣清し。）  
・ 于時、初春令月、氣淑風和。（時に、初春の令月にして、氣淑く風和らぐ。）

6. 『万葉集』の梅

① 『万葉集』によまれた植物ベストテン

- 1 はぎ(萩) 一四一
- 2 うめ(梅) 一一六
- 3 たちばな・はなたちばな(橘・花橘) 一〇七
- 4 すげ・すが・やますげ(菅・山菅) 七四
- 4 まつ(松) 七四
- 6 あし(葦) 五五
- 7 ち・あさぢ(茅・浅茅) 五〇
- 8 やなぎ・あをやぎ(柳・青柳) 四九
- 9 ふぢ・ふぢなみ(藤・藤波) 四四
- 10 さくら(桜) 四一

- ② 梅は第二位を占め、万葉集に数多くよまれた植物である
- ③ ただし、植えられている場所は、大宰府や平城京の貴族の庭園などに限られている
- ④ 東歌には全くよまれていない
- ⑤ 時代的には奈良時代以降
- ⑥ 花の色が分かる梅は白梅。香りをよんだ歌は極めて少ない
- ⑦ 梅は中国からの渡来植物で、まだ広く普及してはいたわけではない

7. 梅花の宴の歌三十二首

- 1 正月立ち春の来らば斯くしこそ梅を招きつつ楽しき終へめ 大式紀卿

正月になって春が来たら、毎年このように梅を招いて楽しみを尽そう

- 2 梅の花今咲ける如散り過ぎずわが家の園にありこそぬかも 小式小野大夫

梅の花よ、今咲いているように、散ることなくわが家の庭に咲き続けておくれ

- 3 梅の花咲きたる園の青柳は蘂にすべく成りにけらずや 小式粟田大夫

梅の花が咲いているこの園の青柳は髪飾りにできるようなったではないか

- 4 春さればまづ咲く宿の梅の花独り見つつや春日暮さむ 筑前守山上大夫

春になると先ず咲く庭の梅の花を一人見ながら春の日を暮らすことであろうか

- 5 世の中は恋繁しゑや斯くしあらば梅の花にも成らましものを 豊後守大伴大夫

世の中には恋の苦しみが尽きない。こんなことならいっそ梅の花になりたいものだ

- 6 梅の花今盛りなり思ふどち挿頭にしてな今盛りなり 筑後守葛井大夫

梅の花は今満開だ。気の合うもの同士で髪に挿そう。今満開だ

7 青柳 梅との花を折り挿頭し飲みての後は散りぬともよし 笠沙弥

青柳を梅の花と一緒に折って髪に挿して、酒を飲んだ後なら散っても構わない

8 わが園に梅の花散るひさかたの天より雪の流れ来るかも 主人

わが家の園に梅の花が散る。それともこれは天空から雪が流れ来るのだろうか

9 梅の花散らくは何処しかすがに此の城の山に雪は降りつつ 大監伴氏百代

梅の花が散るといふのはどこだろう。とはいえ、この城の山には雪が降っている

10 梅の花散らまく惜しみわが園の竹の林に鶯鳴くも 小監阿氏奥島

梅の花が散るのを惜しんで、わが園の竹の林に鶯が鳴いている

11 梅の花咲きたる園の青柳を蔭にしつつ遊び暮さな 小監土氏百村

梅の花が咲いている園の青柳を髪飾りにして遊び暮らそう

12 うち靡く春の柳とわが宿の梅の花とを如何にか分かむ 大典史氏大原

風に靡く春の柳とわが家の梅の花と、その優劣をどうして付けられようか

13 春されば木末隠れて鶯そ鳴きて去ぬなる梅が下枝に 小典山氏若麻呂

春になって木末に隠れて鶯が鳴きながら移る声が聞こえる。梅の下の方の枝に

14 人毎に折り挿頭しつつ遊べどもいやめづらしき梅の花かも 大判事丹氏麻呂

銘々が折って髪に挿して遊んでいるけれども、ますます心惹かれる梅の花だ

15 梅の花咲きて散りなば桜花継ぎて咲くべくなりにてあらずや 薬師張氏福子

梅の花が咲いて散ってしまったえば、桜の花が続いて咲くことになっているではないか

16 万代に年は来経とも梅の花絶ゆることなく咲き渡るべし 筑前介佐氏子首

永遠に新しい年が来ても、梅の花は絶えることなく咲き続けることだろう

17 春なれば宜も咲きたる梅の花君を思ふと夜眠も寝なくに 老岐守板氏安麻呂

春だからなるほど咲いた梅の花よ、あなたを思うと夜も寝られないことだ

18 梅の花折りて挿頭せる諸人は今日の間は楽しくあるべし 神司荒氏稲布

梅の花を折って髪に挿している人々は、みな今日一日ずっと楽しいことだろう

19 毎年に春の来らば斯くしこそ梅を挿頭して楽しく飲まめ 大令史野氏宿奈麻呂

毎年春が来たら、このように梅を髪に挿して楽しく酒を飲もう

20 梅の花今盛りなり百鳥の声の恋しき春来たるらし 小令史田氏肥人

梅の花は今花盛りだ。多くの鳥の鳴き声が恋しい春が来たらしい

21 春さらば逢はむと思ひし梅の花今日の遊びにあひ見つるかも 薬師高氏義通

春になったら会おうと思っていた梅の花に、今日の宴席で会えたことだ

22 梅の花 手折り挿頭して遊べども飽き足らぬ日は今日にしありけり 陰陽師儀氏法麻呂

梅の花を折って髪に挿して遊んでいるが、満足できない日は今日であったことだ

23 春の野に鳴くや鶯懐けむとわが家の園に梅が花咲く 算師志氏大道

春の野で鳴いている鶯の気を惹こうと、わが家の園に梅の花が咲いている

24 梅の花散り乱ひたる岡傍には鶯鳴くも春方設けて 大隅目榎氏鉢麻呂

梅の花が散り乱れている岡のあたりでは鶯が鳴いている。春になって

25 春の野に霧立ち渡り降る雪と人の見るまで梅の花散る 筑前目田氏真上

春の野に霧が立ちこめて降っている雪かと人が見紛うほどに梅の花が散っている

26 春柳蘂に折りし梅の花誰か浮べし酒坏の上に 吉岐目村氏彼方

髪飾りにしようと折った梅の花を誰が盃に浮かべたのだろうか

27 鶯の声聞くなへに梅の花吾家の園に咲きて散る見ゆ 対馬目高氏老

鶯の声を聞くのとともに、梅の花がわが家の園に咲いて散るのが見える

28 わが宿の梅の下枝に遊びつつ鶯鳴くも散らまく惜しみ 薩摩目高氏海人

わが家で咲く梅の下の枝で遊びながら鶯が鳴いている。花が散るのを惜しんで

29 梅の花折り挿頭しつつ諸人の遊ぶを見れば都しぞ思ふ 土師氏御道

梅の花を折って髪に挿して人々が遊んでいるのを見ると都が僂ばれる

30 妹が家に雪かも降ると見るまでにここだも乱ふ梅の花かも 小野氏国堅

彼女の家に雪が降るのかと見紛うほどに、こんなに乱れ散る梅の花よ

31 鶯の待ちかてにせし梅が花散らずありこそ思ふ子がため 筑前掾門氏石足

鶯が待ちかねていた梅の花よ、散らずにいてくれ。いとしい子のために

32 霞立つ長き春日を挿頭せれどいや懐しき梅の花かも 小野氏淡理

霞が立つ長い春の一日、髪に挿しても、いよいよ離れがたい梅の花であることよ

## 8. 梅花の宴の歌の影響

### ① 吉田宜の歌

大伴旅人は、この年の四月六日に吉田宜に梅花の宴の歌を送った。それに対して吉田宜が七月十日付で返書を送っている。そこに記した歌。

諸人の梅花の歌に和へ奉る一首

・後れ居て長恋ひせずは御園生の梅の花にもならましものを（五・八六四）

お仲間に加われなかったのを長く残念がっていないで、お庭の梅の花になりたいものだ

② 大伴坂上郎女の歌（年代不明。冬相聞）

大伴坂上郎女の歌一首

・酒<sup>さかづき</sup>坏<sup>くわい</sup>に梅の花浮<sup>う</sup>け思<sup>おも</sup>ふどち飲<sup>の</sup>みての後は散<sup>ち</sup>りぬともよし（八・一六五六）

盃<sup>さかずき</sup>に梅の花を浮<sup>う</sup>かべて、氣の合うもの同士で酒を飲<sup>の</sup>んだ後なら散<sup>ち</sup>っても構<sup>かま</sup>わない

\* 7 青<sup>あお</sup>柳<sup>やなぎ</sup>梅との花を折<sup>か</sup>り挿<sup>さ</sup>頭<sup>かぶ</sup>し飲<sup>の</sup>みての後は散<sup>ち</sup>りぬともよし（笠沙弥）と似る。

③ 天平十二年（七四〇）に大伴書持（旅人の子、家持の弟）がよんだ歌

追<sup>お</sup>ひて大宰の時の梅花に和<sup>な</sup>ふる新<sup>あらた</sup>しき歌六首

・み冬<sup>ふゆ</sup>つぎ春<sup>はる</sup>は来<sup>きた</sup>れど梅の花君にしあらねば招<sup>ま</sup>く人もなし（一七・三九〇一）

冬に続いて春は来<sup>きた</sup>たけれど、梅の花を、あなた（旅人）以外に招<sup>ま</sup>く人もいない

・梅の花<sup>うめ</sup>み山<sup>やま</sup>と繁<sup>し</sup>みにありともやかくのみ君は見<sup>み</sup>れど飽<sup>あ</sup>かにせむ（三九〇二）

梅の花は山のようにびっしりと咲<sup>さ</sup>いていたとしても、このようにきつと見<sup>み</sup>飽<sup>あ</sup>きないだろう

・春雨<sup>はる</sup>に萌<sup>も</sup>えし楊<sup>やなぎ</sup>か梅の花友<sup>うめ</sup>に後<sup>お</sup>れぬ常<sup>とこ</sup>の物<sup>もの</sup>かも（三九〇三）

春雨に芽吹<sup>め</sup>いた柳<sup>やなぎ</sup>なのか、それとも友である梅の花に遅<sup>お</sup>れずに芽吹<sup>め</sup>いた普通の柳<sup>やなぎ</sup>なのか

・梅の花<sup>うめ</sup>何時<sup>いつ</sup>は折<sup>お</sup>らじと厭<sup>いと</sup>はねど咲<sup>さ</sup>きの盛<sup>さか</sup>りは惜<sup>お</sup>しきものなり（三九〇四）

梅の花を手折<sup>て</sup>るのを厭<sup>いと</sup>う時期はないけれども、さすがに花盛<sup>さか</sup>りの時は惜<sup>お</sup>しいものだ

・遊<sup>あそ</sup>ぶ現<sup>いま</sup>の楽<sup>たの</sup>しき庭<sup>にわ</sup>に梅柳折<sup>うめ</sup>りかざしてば思<sup>おも</sup>ひ無<sup>な</sup>みかも（三九〇五）

今遊<sup>あそ</sup>んでいる楽しい宴<sup>うたげ</sup>席<sup>しやく</sup>で、梅<sup>うめ</sup>や柳<sup>やなぎ</sup>を折<sup>お</sup>って髪<sup>かみ</sup>に挿<sup>さ</sup>せば何も心残<sup>こころなご</sup>りがないからだろうか

・御<sup>み</sup>苑<sup>その</sup>生の百<sup>もも</sup>木の梅<sup>うめ</sup>の散<sup>ち</sup>る花<sup>はな</sup>の天<sup>あめ</sup>に飛<sup>と</sup>びあがり雪<sup>ゆき</sup>と降<sup>ふ</sup>りけむ（三九〇六）

お庭<sup>にわ</sup>のたくさんさんの梅<sup>うめ</sup>の木の花が散<sup>ち</sup>って天<sup>あめ</sup>に飛<sup>と</sup>び上がり、雪<sup>ゆき</sup>となって降<sup>ふ</sup>ったのだろう

\* 8 わが園<sup>うら</sup>に梅の花散<sup>ち</sup>るひさかたの天<sup>あめ</sup>より雪<sup>ゆき</sup>の流<sup>なが</sup>れ来<sup>き</sup>るかも（大伴旅人）を受ける。

右は、十二年十二月九日に、大伴宿祢書持<sup>ふみもち</sup>作<sup>つく</sup>れり。

④ 天平勝宝二年（七五〇）に大伴家持がよんだ歌。

追<sup>お</sup>ひて筑紫の大宰の時の春の苑<sup>うら</sup>の梅の歌に和<sup>な</sup>ふる一首

・春<sup>はる</sup>の裏<sup>うら</sup>の楽<sup>たの</sup>しき終<sup>は</sup>は梅の花手折<sup>うめ</sup>り招<sup>ま</sup>きつつ遊<sup>あそ</sup>ぶにあるべし（一九・四一七四）

春<sup>はる</sup>の中で最高の楽<sup>たの</sup>しみは、梅の花を手折<sup>て</sup>り招<sup>ま</sup>いて遊<sup>あそ</sup>ぶことであろう

右の一首は、（三月）二十七日に、興<sup>きよう</sup>に依<sup>よ</sup>りて作<sup>つく</sup>れり。

【本文】

梅花譚卅二首 并序

天平二年正月十三日

萃于帥老之宅 申宴会也

于時 初春令月 氣淑風和

梅披鏡前之粉

蘭薰珮後之香

加以

曙嶺移雲 松掛羅而傾蓋

夕岫結霧 鳥封穀而迷林

庭舞新蝶

空歸故雁

於是

蓋天坐地

促膝飛觴

忘言一室之裏

開衿煙霞之外

淡然自放

快然自得

若非翰苑 何以攄情

詩紀落梅之篇

古今夫何異矣

宜賦園梅聊成短詠

【訓読文】

梅花の歌三十二首 序を并せたり

天平二年正月十三日、

帥の老の宅に萃まり、宴会を申ぶ。

時に、初春の令月にして、氣淑く風和らぐ。

梅は鏡前の粉を披き、

蘭は珮後の香を薫らす。

加之、

曙の嶺に雲を移し、松は羅を掛けて蓋を傾け、

夕の岫に霧を結び、鳥は穀に封されて林に迷ふ。

庭には舞ふ新蝶あり、

空には帰る故雁あり。

ここに、

天を蓋とし地を坐とし、

膝を促け觴を飛ばす。

言を一室の裏に忘れ、

衿を煙霞の外に開く。

淡然として自ら放にし、

快然として自ら足る。

若し翰苑に非ざれば、何を以てか情を攄べむ。

詩に落梅の篇を紀す。

古今それ何ぞ異ならむ。

宜しく園梅を賦みて、聊かに短詠を成すべし。

【口語訳】

梅花の歌三十二首 序文を加えた

天平二年正月十三日、

大宰帥の老の屋敷に集まって、宴会を開く。

折しも、初春の良い月で、大気は澄んで風は穏やかだ。

梅は、鏡台のおしろいのように白く咲き、

蘭は、玉佩を着けた人とすれ違ったときのように香る。

さらには、

明け方の峰には雲がたなびき、松は薄物を纏って傘を

差し掛けたようであり、

夕方の山の洞からは霧が湧き立ち、鳥は霧の帳に閉じ

込められて林の中を飛び迷う。

庭には春に生まれた蝶が舞い、

空には去年の秋に來た雁が帰ってゆく。

ここに、

天空を傘とし、大地を敷物としてくつろぎ、

膝を寄せ合って、盃を巡らせる。

一堂に会して、内には言葉も不要なほどに打ち解け、

外には良い景色に向かって襟をくつろげる。

心は淡々として自由であり、

気分は快く満ち足りている。

文筆以外の何によつてこの思いを述べ尽くせようか。

昔の中国には落梅の漢詩がある。

昔と今と、中国と日本と、何の違いがあるうか。

さあ、この庭園の梅を短歌によもうではないか。